

多高通信

2015年(平成27年)4月20日 月曜日
宮城県多賀城高等学校
多賀城市笠神2-17-1
発行 防災教育担当

津波標識設置活動特集号



多賀城高校では、東日本大震災で多賀城市内に津波が襲った時刻と下校時刻が重なり、帰宅途中に津波に遭った生徒もいた。奇跡的に生徒は全員無事だったが、学校全体で防災・減災について考え、様々な取り組みを行っている。今回はその中で、本校が3年前から取り組んでる津波高標識設置活動について特集する。

通学の安全と伝承 標識設置活動はセカンドステージへ

津波



標識設置活動をする生徒-多賀城市桜木地区

2011年3月11日、午後3時過ぎ、多賀城高校では校庭に避難した生徒職員を記入させ、危険域を把握からの吹雪と日没前に下校させた方が安全との見解から、希望する生徒は、安全に留意させ下校させた。ラは家庭用にし、その家族へ告知で津波警報発令を知ったもの、市内防災無線のサイレンは鳴らず、市内の静寂し、誰一人、市内中心部まで津波が及ぶとは全く想定していなかった。帰宅させたことにより、自宅津波に襲われた者や歩道橋に逃げ上がりそのまま一夜を過ごした者もあり、犠牲者ゼロは奇跡であった。「何をなすべきか」考え

多賀城市との連携 と新たな手法へ 標識活動

東日本大震災から4年が経過し、街に残る津波跡も減った。歩いて津波跡を探し、標識を設置する従来の方法は困難なものになってきている。そこで、多賀城市とも連携を取り市内の各自治会等を通じて、市民に直接会って話を聞き、自宅等に残る痕跡や目印をたよりにして、電柱に標識を設置するという新たな方法を検討している。

減災市民会議への協力

2015年3月に行われた国連防災世界会議開催に合わせ、多賀城市でも「減災市民会議2015」が行われた。多賀城市では本校が設置した標識をたどりながら、市内桜木に建設された災害公営住宅を巡るとい



国道にも初設置

国土交通省管轄である国道は、標識の設置許可が下りなかった。しかし、2015年2月、ようやく浸水域を通る国道45線への設置が認められた。今回許可されたのは、浸水域に架かる多賀城八幡歩道橋と多賀城駅前歩道橋で、わずかではあるが、未だ津波痕跡が残る貴重な建造物である。設置当日は、まもなく震災から4年目を迎える時期にあたり、報道各社が取材に訪れた。生徒会を中心にユースで全国放映された。

痕跡探し

震災から1年以上も経過すると、洗浄や風雨によって、津波痕跡はかなり減っていた。はつきり残っている箇所もあったが、住民の方にも聞きながら、少しずつ



各種申請

標識を設置するのは、主に東北電力とN.T.T.の電柱になる。所轄の事業所を回り、ようやく設置を認める回答を得たが、電力柱はアルミ製、N.T.T.柱はプラスチック製とそれぞれ素材が指定された。予算が限られる中、県教委からの補助で製作できた。

設置作業開始

調査開始から1年後、震災からは2年5ヶ月後の2013年8月12日、設置式が多賀城市のホテルキヤンズプラザ前で行われた。有志生徒16名が参加道された。



自治会を前に説明する生徒

た結果、まず、多賀城市内のかを知ることが重要と判断。浸水域をカラー表示した学校が中心の通学防災マップを完成させた。震災から1年後の春に、生徒一人一人に自宅からの通学路を記入させ、危険域を把握させた。1枚は学校に保管、判断する資料とした。もう1枚に留意させ下校させた。ラは家庭用にし、その家族へ告知で津波警報発令を知ったもの、市内防災無線のサイレンは鳴らず、市内の静寂し、誰一人、市内中心部まで津波が及ぶとは全く想定していなかった。帰宅させたことにより、自宅津波に襲われた者や歩道橋に逃げ上がりそのまま一夜を過ごした者もあり、犠牲者ゼロは奇跡であった。「何をなすべきか」考え



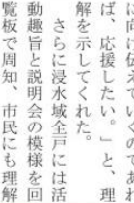
測量

ある程度のデータが集まったなら次に測量である。測量は左の写真のような痕跡に水準器の標準を合わせ、箱尺(標尺)を用い、比高を計測する。その値を



住民の理解があつてこそ

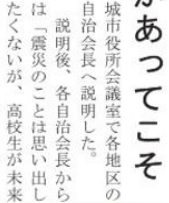
この活動で、最も懸念されたのが地域住民の反応であった。この震災で心に傷を負った市民も多い。そこで、多賀城市役所に相談し、市内浸水域の自治会長にこの活動の趣旨を理解してもらった。説明会では、自治会長から「震災の各自自治会長から説明する、各自自治会長から説明する、各自自治会長から説明する」と、高校生が未来に向けて伝えていくのであり、応援してほしい」と、理解を示してくれた。



この模様は在仙テレビ局5社すべてと新聞各社で報道された。



電柱に示すことで正確な高さを求めることができる。この作業を1本1本行う。



この活動で、最も懸念されたのが地域住民の反応であった。この震災で心に傷を負った市民も多い。そこで、多賀城市役所に相談し、市内浸水域の自治会長にこの活動の趣旨を理解してもらった。説明会では、自治会長から「震災の各自自治会長から説明する、各自自治会長から説明する、各自自治会長から説明する」と、高校生が未来に向けて伝えていくのであり、応援してほしい」と、理解を示してくれた。